
君だけをサポート！

密月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君だけをサポート！

【Nコード】

N36280

【作者名】

密月

【あらすじ】

「大切な人をサポートしないか？」夢の中の男にそう声をかけられた。飼い主を大事に想うあまりに成仏しきれなかった動物たちが、人間の姿になり飼い主を守る会社。『夢幻の空』。想いを背負い、彼らからみた世界はどのような世界なのか…

プロローグ（前書き）

動物が飼い主のためにどたばた走り回る小説が書いてみたかっただけやってみました。

擬人化・死にネタがありますので、あまり好きでない方はご遠慮ください。

文章の作り方など未熟な点が多々ございますが、よろしく願います。

ブローグ

ボクはいつだって君を見てきた。

思い出したらきりがないけど色々なことしてもらったね。

そうそう、あのときのこと覚えてるかな？

ボクが体調を崩して倒れたとき君はつきっきりで看病してくれたね。うれしかったよ。

純粹にうれしかった、君と一緒にいれてすごくうれしかった。

でも、なんで？

ねえ、なんで泣いてるの？

そんな悲しい顔でこっちを見ないでくれよ……。

ボクまで寂しくなっちゃうじゃないか。

君は笑ってる顔が一番なのに……。

なんだか、眠くなってきちゃったな。

でも、寝たらいけない気がする。

もう君と会えなくなるようで。

「……ゆつくり、寝ていいよ。また、また……会おうね……」

そんな君の声が聞こえた気がした。

大粒の涙をボクに落として。

ゆつくりと、ボクは深い眠りについた……。

そして物語のページはめくられた

第一話：お誘い

「あれ、ここ、どこだろ？」

ボクは気がついたらこじんまりとした何もない真っ白な部屋の中にいた。

さっきまでボクのご主人・・・すいたつはやて 水稻 颯くんと一緒にいたのに。ちよつと寝てる間にボクをこんなところに置き去りにしたのかな？ そんなことないよね・・・颯くんに限って。

ボクは嫌な気分を振り払うかのように首をふった。

「それにしても、何もない部屋だなあ。・・・はやく帰らないと。」

「君は帰ることはできませんよ。」

見上げると全身黒ずくめで長身の男がほほ笑みかけていた。

さっきまでこの部屋には 誰もいなかったはずなのに。

急に怖くなってきて、思わずしりもちをついてしまった。

「だ、誰・・・？」

「おやおや、そんなに怖がる必要はありませんよ。ね、タロウくん？」

そういうと男は優しくボクを抱きあげた。

よく見ると優しい目をしている。真っ黒だから心まで真っ黒な悪いやつなのかと思った。

人は見かけじゃないなあ、と改めて思ってしまう。

ボクがそんなことを思っていると男はボクを見つめてこう言ってきた。

「・・・名前：タロウ。犬種：パピヨン。性別：オス。年齢：2歳2カ月。性格：忠誠心が強く、人懐っこい。元気がよいが心臓病持ちだった。・・・血が濃すぎたんですね。タロウくんは。」

びっくりだ。

なんで全部わかるんだろう？

「あ、あんた・・・一体・・・？」

ボクは驚きを隠しきれないまま男にそう問いかけた。

男はボクの質問には何も答えず逆に問いかけてきた。

「飼い主をサポートしませんか？」

「は？」

「君は死にました。でも颯くんへの想いが強くて成仏しきれないでいる。颯くんを守るために私と手を結びませんか。」

何言ってるんだろう、こいつは。

頭大丈夫か？颯くんが言ってた、あれか。『中2病患者』ってやつか。

やれやれ、今の時代「あにめ」だか「まんが」だか知らないけど、そういう影響受けるやつが沢山いるって言ってたな。

それに、ボク死んでないし。

「・・・ボクは、死んでない。嘘も大概にしるよ。」

「いえ、君は死にました。つい先刻、ね。」

「嘘だ！だって、ボクっ・・・」

大粒の涙がぼろぼろと零れ落ちた。

犬だって、泣けるんだよ。

男はボクが泣いたのを見て少し表情を変えたが、優しく微笑んだ。

「・・・信じられないでしょうが、これは事実です。申し遅れました。私、『夢幻の空』のオーナーをやっております。スカイ、と申します。空、とでもお呼びくださいませ。」

「夢幻の空？」

「はい。簡単に説明しますと、君のように死んでしまった動物で飼い主を強く想う心を持つ者たちを集めて仕事をする会社でございます。飼い主のサポートをして恩返しをしたり、なんでも屋のようにボランティアなどをいたします。」

空はボクの頭を優しくなでながら言った。

触れてくる手が大きくて、でも暖かくてきもちよかった。

「・・・でも、ボクは犬だよ。人間みたいに働けないよ。」

「その点のご心配なさらず。君には人間の姿を与えます。当社はま

だ経営を始めたばかりでして。社員があまりいないのです。ご協力、願えますか。」

ボクは少し考えてしまった。

空は決して悪い人ではないだろう。でも、そんな、こんな話あるの
 だろうか？

そもそも本当に死んでしまったのだろうか？

考えてみればわからないことだらけだけど、ボクの周りに颯くんがいないのが、唯一の証拠だろう。

ボクは空にいやらしく、笑ってみせた。

「いいよ、その会社、入るよ。もちろん、三食昼寝つきで住み込みでいいよね？」

「ふふ・・・もちろんです。では、我々の会社に参加しましょうか。タロウくん。」

「え？いくつて……雇ないよ？」

空はにこり、と笑ってどこから杖をとりだした。

何か嫌な予感がした。

「いいですよ。」

持っていた杖は勢いよく床を突き破り、底の見えない穴に空はボクを抱いたまま自ら飛び込んだ。

[illegible]

「はは、大丈夫ですよ。．．．あれ？タロウくん？」

ボクの意識はここでいったん途絶えてしまった。

第一話：お誘い（後書き）

ここからタロウたちの物語が書きつけられていきます。
さあ、どう動いてくれるのでしょうか。

第二話：入社

「う、ん・・・？」

「おや、気がつきましたか。」

あれ、ボクなんでソファーなんかで寝てんだ？

それに、ソファーってこんなに小さかったっけ・・・？

「空、ここは？」

「ここが我々の会社ですよ。それより、鏡、見ます？気が付いていないようなので」

そういうと手鏡を渡してきた。

・・・鏡の使い方とかわかんないって・・・。

颯くんは、確か・・・手にもって・・・手？

「・・・あれ？」

犬の手じゃない。すらりとした指が5本ある。

この手の形って、颯くんたちと同じじゃ・・・。

「ちょー！！鏡よこせ！！」

ボクは慌てて空の手から鏡をむしり取った。

「あんまり乱暴に扱うと壊れてしま・・・」

「いいから！！・・・あ・・・」

そこにうつっていたのは、黄土色の髪で黒い目をした青年がうつっていた。

これがボク？人間じゃないか。

颯くんと同じような動作で鏡を動かしてみる。

鏡の中には目を輝かせた青年がボクを見ているだけである。

「・・・タロウくん？あの？」

「・・・」

ボクは空と鏡の中の青年を交互に見た。

そして、自分の目で自分の体を見てみた。

たち耳系な犬耳パーカーにジーンズ、手には指のとだけきられて

いる手袋。

「タロウくん？」

「そつ空ああああ！！なっ、何これ！なんでボク人間？！これ、ボク？！」

「うおお、お、落ちついてっ」

「せつ、説明きぼんぬうううう！！」

「えっ、えつとですね！君が気を失ってる間に人間化させたんですよ！」

人間化とかそう簡単にできるのかよ・・・。

というより、本当にこの人なんなんだ。

ただの人間がこんなマネできないよね。

「おい、お取り込みんとこ悪いんだけど、オーナー？おれのこと、呼んだまま放置？」

声が聞こえたほうを見ると、黒髪短髪のめんどくさそうな顔をした青年が扉のところに立っていた。

「あ、ラスクくん。」

「ラスクって呼ぶな、今の名前はリョウだよ。で？オーナー？何？仕事？」

「あ、それもありますけど・・・」

「・・・何？この茶色い毛玉。きたねー色してんな」

なっ！ボクの毛色汚いとかっ・・・！初対面で失礼なやつだな！しかも、こいつ見下してくるし！！なんだよ！こいつ！！

「きっ、汚いつてなんだよ！！」

「は、そのまんまだぜ？お前、目え見えてんのか？」

「なんだとおおお！！」

「まっ、まあまあ二人とも落ちついてください！」

空が慌ててボクらの中に割って入ってきた。

うるさいな、空には関係ないのに！

何？！お人よしなのかよっ！ぷうー！

「なんでオーナーがとめんの？」

「いや、あのですね。二人にはペアになってもらおうかと。」

「「はあ?!こんなめんどくさそうなやつと?!」」

思わずはもってしまい、お互いに嫌そうな目で見える。

「・・・よく見たら、リヨウのやつなんか悲しい目、してる気がするような・・・。」

そんなことを思ってたらリヨウが口を開いた。

「・・・ちつ。めんどくさいけど、面倒見てやるよ」

舌打ち?!今、こいつ舌打ちしたよねっ!

むきー!むかつく!こういうタイプ、嫌い!

「ま、まあまあ・・・とにかく、二人とも仲良くしてくださいね?で、さっそくですが依頼がきています」

「えっ、もう仕事お?」

「何いつてやがる、このぼけ。お前、おれの足ひっぱったら承知しねーぞ。」

「なあにおおう!」

「ふふ・・・依頼の内容にうつりますね。今回の依頼は、颯くんのお友達の佐倉 明くんからですね。『大切なペットが逃げてしまいました。小さな鳥です。おれがすっかり窓をあけっぱなしにしていて、逃げてしまいました。どうか、探してくれませんか。お願いします。』・・・だそうです。」

「今回は鳥探しか・・・かったりーな。」

「明くん、そんな人じゃなかったはずなのに・・・」

「はあ?どういことだよ。」

「いや、昔は動物大事にしててうつかり、ってこともなかったんだ。おかしいなあ。」

ボクが首をひねってそういうと、二人の表情が変わった。

あれ?なんかまずいこと言ったかな?

「・・・ラスクくん、気をつけて、依頼に行ってくださいね。」

「ああ、わかつてる。つか、ラスクっていうんじゃねえ。」

「?????」

「おら！いいからさっさと準備しやがれ！できしだい行くぞ！」
そういうと、リヨウは勢いよく扉を閉めて出ていった。

リヨウが出ていってから、ボクは空と一緒に準備をすることにした。

何を持って行こうか悩んでいると、空はにこりとほほ笑んだ。

「タロウくんは、別に何も持っていなくていいですよ。」

「はあ？」

「多分、ラスクくんがほとんど荷物用意してくれると思いますよ！それに、武器なんて君は拳で十分ですしね。」

やっぱりこいつ、頭おかしいんだ。

仕事いくのに手ぶらって……。ふつうないだろ。

というか、武器とか……。物騒なことなあ。

「あ、うん。わかった……。じゃあ飴玉でももっていくかなあ。」

「私のお手製飴でも持っていけますか？」

「うん。ありがとう。じゃあ、行ってきます！」

なんだろ、なんか嫌な予感がするなあ……。

そして、ボクは足早にリヨウとの待ち合わせの場所へと走って行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3628o/>

君だけをサポート！

2010年10月17日17時22分発行